

調査結果の分析と課題

1. 学校図書館所蔵資料整備状況調査

蔵書冊数、蔵書構成

全ての学校において、蔵書冊数は増加傾向にあります。文科省が示した「学校図書標準」を満たしているのは全28校の67.9%で、H21年度末の岡山県内全小学校の達成率を下回っています。また、蔵書構成では、9類(文学)の割合が圧倒的に高くなっています。一方、調べ学習資料については、活用されている所蔵資料の一層の充実が必要と認識されています。「読書センター」「学習センター」としての機能を発揮するために、蔵書の質・量ともに更なる充実が必要とされます。

蔵書の更新

具体的な選書・除籍基準を定めている学校は約半数ありますが、その基準が明文化されている学校はごく少数です。専門的な観点からの資料を選書し、有効な蔵書の構築・更新をし続けることが望まれます。

公共図書館の利活用

蔵書の不足補充として、約9割の学校が、公共図書館の貸出サービスを利用しています。公共図書館は学校図書館に向けた各種のサービスを整理し、学校司書や図書整理員だけでなく教職員へのアピールも含めて、より利用しやすく工夫を凝らして学校図書館との連携を深めていくことが求められます。

2. 学校図書館所蔵資料利用状況調査

貸出冊数、貸出・返却方法

児童一人当たりの年間貸出冊数は約50冊で、中学年(3~4年)の占める割合が高く、高学年(5~6年)では、中学年の約半数まで低くなる傾向が見られます。また、コンピューターシステム導入校では貸出・返却処理にも利用していますが、未導入校では手作業による処理が実施されています。学校図書館の利用促進を図る基礎資料として利用統計を把握するためにもコンピューターシステムの活用が望まれます。

展示、レファレンス

全ての学校で学習活動に関連づけた展示が実施されて、工夫にあふれた取り組みが積極的に実践されています。児童からのレファレンスも、ほぼすべての学校で実践され、学校図書館が学習活動に役立っていることがうかがえます。今後は集積したレファレンス情報を他校とネットワークで共有し、効果的な展示や選書への活用が望まれます。

授業・学習支援

「図書」の時間をはじめ、社会や理科において8割以上の学校が学校図書館を利用しています。また、4割の学校で総合的な学習の時間にも利用されています。一方で、高学年ほど授業における定期的な学校図書館の活用が難しい状況がうかがえます。情報リテラシーの育成を支える「学習情報センター」としての機能をより一層充実させることが望まれます。

3. 学校図書館情報処理環境調査

データベース化

所蔵資料がデータベース化されている学校は、3割弱にとどまります。データベース化や公共図書館と全学校図書館とのネットワーク化は未導入校では8割以上、また、既導入校の全てにおいて、その実施が望まれています。事務の効率化を図り、児童と接する資料や情報を効率的に実践できるよう、情報処理技術を活用して、確実な蔵書管理と正確な利用状況の把握が可能なシステムの導入が求められます。

他館との連携

公共図書館のインターネット予約を活用している学校は約1割、メーリングリストについては、ほぼ活用されていない状況です。人的な連携を基礎として、物流も含めた公共図書館と学校図書館のネットワークの仕組みづくりが課題であると言えます。

4. 学校図書館地域社会連携状況調査

地域人材の活用、読書推進活動

9割近い学校がボランティア活動を利用しており、読み聞かせを中心に学校図書館の読書活動を推進しています。今後は、継続的かつ体系的なボランティアの育成とあわせて資料の整理、保存分野での人材育成が重要です。